

折りにふれて、わが半生の諸断片を綴ることを求められ、その大半はなんらかのかたちで記してきたけれど、もっとも多感な中学生時代については、これまであまり触れたことがなかった。私の過去の日々の中でも、中学生時代がとりわけ思いものだったので、想い出の小箱に閉じ込めておきたかったからなのかもしれない。

あるいは年甲斐も無い照れなのか、それとも銜いなのか、自分でも定かではないが、この夏にいただいた一通の手紙は、私の中学生時代への追憶の窓を一気に開いてくれた。覚えていて下さいますか」との書き出しの連筆は、私が中学一年生のとき、初めて英語を教室で習った田村(木倉)フミエ先生(本紙

つとむ山がれ

いて

のコラム執筆者で教育評論家の木倉成實氏夫人)からのものであった。田村先生は、私の一級下でたしか植物観察が得意だった宮坂敏夫君が静生と号して主宰されている俳句誌『丘』の同人で、私が昨年編んだ父の遺句集を最近読まれました。このあまりペンをとりました」と書いて来て下さったのである。もう四十二年も昔のことなのに、教師になりたてで美しく清楚な田村先生の教室風景の数々は、THE GATE

TO THE WORLD BOOK ONEという教科書の幾ページかとせむせむ、今もはつきりと憶えている。私の次の学年からは有名なテキスト JACK AND BETTYになり、私たちも二年生のときからはそれを使っていたが、右の教科書は A BOOK? YES. から始まっていて、私たちの英語は、これがスタ

### 清水中学校の頃

ートであった。教科書と言えば、終戦を小学校三年生で迎えた。昨日まで使っていた教科書に墨を塗ったいわゆる「墨塗り世代」の私にとって、中学校で用いた文部省著作教科書『民主主義 上』の新鮮な印象も忘れがたい。私が松本市立清水中学校に在学したのは、昭和二十四(一九四九)年四月から二十

は、クリスチャンでもあっただけに民主主義の新しい精神を大いに鼓吹され、生徒会活動も全面的に私たちの手にゆだねて下さった。道路一つ隔てた清水小学校の校舎に間借りして発足した新制中学としての清水中学校は、私たちが三年生になる

開かれた全市の中学校對抗(当時は市内に五校の中学校があり、五校の競技会と言った)で連続優勝を果たし、また第一回県下リレーカーニバルに優勝して植原悦二郎元大臣杯を獲得したり、県新記録をつ

このような清水中学校を私は去りがたく、『窓』の編集後記には、当時の過ぎゆく日々を惜しんで「全く感無量である」と私は書いています。こうして、私は清水中学校を巣立って行ったが、それは講和条約によって日本が独立した直後でもあった。下級生(二年「組」の中野幹久君(現・市民タイムス編集局長)は、「皆さんは一日も早く独立日本の為につくして下さい」(卒業生を送る)「清水中学校報」第十一号(昭和二十七年三月二十日)と記して、私たちを送ってくれた。この同じ『校報』に私は「春の雪」と題して、「校庭の深雪踏む日も名残なり」「並の光さこゆる窓や陽炎たつ」などの俳句を五句投じていたことに、今回気がついた。私の十五歳の青春でもあった。

七(一九五二)年三月まで、まさに戦後の新憲法下に民主主義が緒についたばかりの時期であった。右の『民主主義 上』は、「すべての人間を個人として尊厳な価値を持つものとして取り扱おうとする心、それが民主主義の根本精神である」と高らかに謳っていた。そうしたなかで、三年次の担任だった社会科の嶋田正次先生

盛大に行われて、私も実行委員会を担った。第二公民館でヴァイオリンの独奏をした。音楽では市内の連合音楽会が松商学園講堂で毎年行われ、三年次にはパッハの二つのヴァイオリンのための協奏曲を弾いたが、当時の清水中学校はスポーツでも断然の強さだった。私自身が主将をつとめた陸上競技は県営グラウンドで

稿一式が出てきて、亡き師の筆跡にも久しぶりに触れたのである。

(中嶋 嶺雄・東京 外語大教授)